Mansfield Park の主題と構成

藤　田　清　次

I

1813年1月29日（金）に姉カサンドラ宛に書いたジェーン・オースティンの手紙には，いつもの通りの才気が満ち溢れているだけでなく，節度と正しい趣味を説いてやまなかった彼女にしては，いつになく意識の高ぶりが見られる。彼女の第二作『高慢と偏見』の初刷がロンドンから送られて来たからである。それは姉宛のいつもの手紙のほぼ半分ほどの長さに過ぎないものではあるが，何度となく書き直しをして完成した作品が，いよいよ，活字になったのを手にした作者の喜びが文面に溢れ，"I have got my own darling child" とまで書いている。時にジェーン・オースティンは齢三十五を重ねていた。婚期を逸した独身女性が書き記す "my darling child" という字句には，異様に切実な響きが感じられる。多分，人生に求めていた，女としてのあこがれのいくつかを断念し，創作活動に人生の意義を見出そうとする彼女の決意の程がそこにこめられていたと言うのは行き過ぎであろうか。そしてジェーン・オースティンは，自分のペンが創り出した『高慢と偏見』の女主人公エリザベス・ベネットという女性について，多分，作家としての節度を忘れた，次のような発言をしている。

I must confess that I think her as delightful a creature as ever appeared in print, and how I shall be able to tolerate those who do not like her at least I do not know.

これは，作家が自作についてなすこの種の発言にしては，いわば，他に類を見ないほど，はしたないもののようにも思われる。もっとも，まだ一

家庭婦人に過ぎない女性が，何もかもを打ち明け合うことにしている姉宛の私信に，ふと，書き記した一片の感想を，真面目に取り上げること自体，いささか，大人げないことなのかも知れない。しかし，ジェーン・オースティンが得意の絶頂の一瞬間に最愛の姉に洩らした言葉には，彼女の偽らざる本心がこもっていると言えないことはない。そしてジェーン・オースティンのこの言葉以上に，彼女の作品解明上，大きな手がかりの一つを提供してくれるのが，同一書簡の中に見出される次の一節である。

Now I will try to write of something else, and it shall be a complete change of subject——ordination.

ジェーンの既刊の二作 *Sense and Sensibility* (1811) と *Pride and Prejudice* (1813) は，ともに，「結婚」が主題となっている。微細で透明な心理描写において，よどみなく運ばれる筋の展開において，鋭いウイットや才気あふれるユーモアとアイロニーにおいて，そしてその他もろもろの意図においても，それ以前の作家による他の多くの作品と比べて，格段の前進と洗練さが認められるにせよ，女主人公として設置された人物が，様々の波瀾と葛藤を経た後に，意中の男性と結ばれる，というパターンを踏襲していることに変わりはない。それらは，同一の人間模様，同様の筋書，同形の展開の繰り返えしであり，舞台の狭さ，主題の重複が大いに気になるところである。それらには，いわゆる「職業人」は描かれていない。それに，*Sense and Sensibility* の原型である *Elinor and Marianne* (1797–98) や *Pride and Prejudice* の原型である *First Impressions* (1796–97) を書き上げてから既に15年近くの歳月が流れ去っている。長い沈黙と忍従の期間に，読書体験と人生観察とを重ねて，作家としてひとまわりもふたまわりも大きく成長を遂げたジェーン・オースティンが，二作刊行という実績をふまえて，次の大作の執筆に取りかかる際，物語の幅をひろげ，主題に変化を持たせたいと思ったのは，当然過ぎることであったと言える。そしてジェーン・オースティンがここで言う新作は，1814年に刊行されることになる *Mansfield Park* にほかならない。そこで，「主題を一変させたい」という作者のもともとの意図 (original design) が，果して作者の発言通りに実現されたかど

うかを検討するのをこの小論の主旨としたい。

II

Mansfield Park の制作に取りかかったジェーン・オースティンが最初になした作業は，軍港ポーツマスの子沢山の貧しい家に生まれ育った少女ファニー・プライスが，彼女の伯母の邸宅である Mansfield Park に引きとられるに至るいきさつを簡潔に描くことであった。しかし，作者はこの作業そのものよりも，ファニー・プライスを呼びよせる実務にたずさわる伯母ノリス夫人の性格描写に，さらに大きな意欲を燃やすことになる。しばしば，読者に不便を感じさせるほどに，筋の運びそのものには，極端に用語の節約を計りながら，ノリス夫人の性格を浮き彫りにする「せりふ」には，長過ぎるほどの言葉を費している。第一章から第三章にかけての見せ場は，「多弁で，おせっかいで，けちで，出しゃばりで，そして口先だけの女」であるノリス夫人の性格の分析的描写であると言ってよい。そして *Mansfield Park* という作品の巻頭における作者の力の配分は，計らずも，ジェーン・オースティンが抱いていた小説観の一端を読者に明示してくれていると私は解釈したい。つまり，彼女も，また，小説の本領は性格描写にあると信じていたのである。(この信念はこの大作全篇にわたって一貫して堅持されている。) そしてノリス氏の死去に伴い，Mansfield Park の所有者トマス・バートラム卿の次男で，本編の男主人公であるエドマンドの将来との関連において，「聖職推薦権 (presentation)」の問題が取り上げられるのは第三章においてであるが，この話題はその場限りのものとなっており，作者の関心は，トマス卿の英領西インド諸島の一つである Antigua 行きに移っている。

トマス卿が長男トムを伴って，約一ケ年の予定で旅立つと同時に，厳格過ぎる父親の束縛から開放されたバートラム姉妹のマライアとジューリア，そしてノリス氏の後任牧師として赴任して来たグラント博士の妻君の異母弟妹に当るヘンリーとメアリー，などの主要人物たちが続々と物語の前景

に登場して来て，余りにも "gravity" をよそおい過ぎるトマス卿のいなくなった Mansfield Park と，その近隣を舞台にして，勝手気儘に，のびのびとそれぞれの演技を行うことになるが，物語は，いつしか，ヘンリー・クローフォードという青年を中心に展開されて行く。そして *Mansfield Park* という物語全篇を通じて，このヘンリーという人物の描写に割かれるスペースは，この物語に登場する他のどの人物に割かれるそれを遥かに上まわることになる。

ヘンリーは決して世に言う好青年ではない。後にバートラム家の長女マライアと結婚し，彼女に裏切られることになるラッシュワース氏に言わせれば，「背は低いし，小男で，いやらしい男 (I, xviii)」でありながら，莫大な財産（年収五千ポンド）を持ち，女ったらしなところがあって，奇妙に女性に人気のある男である。厳格過ぎる父親と放任主義の母親とに育てられたバートラム姉妹は，同時に，このヘンリーを恋するようになる。そして「恋に幅を持たせている (I, v)」ヘンリーは，知的に足りないところのあるラッシュワース氏との結婚話が進行中のマライアとも，その妹ジューリアとも，恋愛ごっこをするのをやめない。ヘンリーとマライアとの間で，大いに気になる微妙な会話がなされ，また，ヘンリーのことを妹のメアリーは，「この上なく恐ろしい浮気男 (the most horrible flirt) (I, iv)」などと言う。また，ヘンリーの妹メアリーは，バートラム家の次男エドマンドに接近し，彼も，メアリーの人間的欠陥を承知しておりながら，彼女の巧妙な話術や豊かな表情に心ひかれる。それに実の兄のように自分をかばい，いたわってくれるエドマンドを心ひそかに慕っているファニーがからまることになり，物語は，ジェーン・オースティンの円熟し切った構成力に運ばれて，微妙にそして円滑に展開されて行く。そして相思相愛に近い間柄になったエドマンドとメアリーとの間で，「職業談義」がなされ，話は牧師のことに及ぶ (I, ix)。作者が牧師のことに触れるのは，これが二度目であるが，それは，ここでも，ごくさりげないものであり，物語の関心は，やがて，他の主要人物たちの動静に移ってしまう。

ヘンリーとマライアの二人を扱う作者の筆は，いよいよ，微妙をきわめ

る。散歩中のマライアとヘンリーを，二人っ切りで視界から見えなくするくだりは，多分，当時の小説における男女関係の描写としては，一つの極限を示すものであると言えよう。そして同じ第十章には，「マライアの罪(her sins)」という字句が用いられている。ラッシュワース氏との結婚を目前に控えたマライアは，ヘンリーのことを考えると楽しくなるが，結婚のことを思うと，とたんに，憂鬱になってしまう。「彼女に出来る最善のことは，結婚問題を五里霧中の出来事と考え，その霧が晴れ上がったあかつきには，何か別のものが見えて来るものと思っていた (I, xi)」ほどである。父が西インド諸島から帰国するまでに，いろいろなことをやってしまおうとも思っている。

さて，物語には，メアリーとエドマンドとの会話の場面が設定され，エドマンドがマライアとラッシュワース氏との結婚は，マライアの自由意志によるものであると主張するのに対し，メアリーは，冗談まじりではあるが，それはマライアの犠牲的行為であると言う。そして話が牧師職のことに触れ，牧師の報酬が安いこと，牧師の社会的地位は陸海軍人のそれ以下であること，そして牧師は怠け者であると断言したりする。そしてグラント博士は美食家であると言う。ここでも，牧師職に関する話は，いわば，ヘンリーとマライアとを中心とする浮ついた恋愛物語の中に挿入された一つのエピソードの役割しか与えられていないと私は解釈している。

ところで，父より先に帰国したトムの友人イェイツ氏が登場するとともに，物語は意外の展開を見せる。ある貴族の次男坊で，素人劇団の主宰者である彼は，流行を追い，金遣いが荒いという以外には，何一つ取り柄のない男である。たまたま，ある友人宅での上演を計画していた素人芝居が，上演二日前に，彼の祖母が死去したため，流れたばかりであった。彼の芝居好きは始末におえないほどで，相手かまわず，芝居の話を持ちかける。それに釣られてトムが，「マンスフィールドでも，ちょっとした芝居でもやろうじゃないか」と切り出す (I, xi)。遊び好きのヘンリーは乗り気になるが，エドマンドは，留守中の父に申訳が立たないし，また，マライアの立場が微妙だから，芝居をやるのはいけない，と反対するが，もともと，

言い争いの嫌いなエドマンドが折れることになる。そして上演脚本のことで，すったもんだの末，結局，ドイツの劇作家 August Friedrich Kotzebue (1761–1819) の *Das Kind der Liebe* (1788) を改作した，Mrs. Inchbald (1753–1821) の *Lovers' Vow* (1798) が第一候補脚本として浮かび上がる。劇中で扱われているシチュエーションといい，登場人物が口にするせりふといい，きわめて家庭的でないこの脚本を採用することに，ファニーは批判的であり，また，エドマンドも反対を唱えるが，もちろん，聞き入れられる筈がない。次いで，配役の話になると，ヘンリーは言葉巧みに，マライアを自分の相手役にまわそうとする。そこでヘンリーをめぐるマライアとジューリアの角逐が演じられるが，もちろん，マライアの方が我を通すことになる。『恋人の誓い』の配役の問題が一段落するとともに，ヘンリーはマライアを相手に，芝居の稽古にかこつけて，自分の本心を吐露するという行き過ぎた行動に出る。ジューリアは失恋の苦しみを味い，今に姉は罰が当ると思っている。しかし，他の人たちは，ヘンリーとマライアの行き過ぎた振舞いに気がつかない。いよいよ上演の日が二日後に迫り，大工を入れて舞台装置をしたり，バートラム卿の書斉を勝手に模様替えしたりしたところへ，突然，当のバートラム卿が予定よりも早く帰宅する。それからの細部描写は，ジェーン・オースティン的な軽快な筆致で，流れるように運ばれる。イェイツ氏の鈍感さむき出しのせりふや，このような事態に立ち至っても，なお，マライアとラッシュワース氏との婚約は自分の手柄であると自慢話を長々とするノリス夫人の描写などは，典型的なジェーン・オースティン的コメディーの世界である。マライアは，ヘンリーが彼女との結婚の意志を表明してくれさえすれば，ラッシュワース氏との婚約を解消したいと思っているが，ヘンリーは，マライアとジューリアの両方に恋心を起こさせたまま，バースの叔父のところへ去ってしまう (II, ii)。

III

ヘンリーをバースへ去らせた作者は，いよいよ，ファニー—エドマンド

—メアリーの心理的なもつれという微妙な作業に取りかかる。臆病で，自己卑下の心が強過ぎて，人前では，必要以上におどおどするファニーが，恵まれた環境に移し植えられて，よい影響とよい待遇を受けた結果，容色が目立ってよくなって来たことを，トマス卿とエドマンドの二人も認めるようになり，彼女にも恋をする女性としての適格性が備わって来たところで，作者は，ファニーが心ひそかに慕っているエドマンドの心を，そのファニーの方へではなくて，メアリーの方へ傾斜させている。一方，トマス卿は，ラッシュワース氏が "an inferior young man" であり，"as ignorant in business as in books" (II, ii) であること，また，マライアの彼に対する態度が冷淡で無関心であることに気づき，父親として，娘の本心はどうなのかと念を押すのに対し，彼女は，彼と結婚しても仕合わせになれると答える。トマス卿も，「ラッシュワース氏もよき交際によって人間が磨かれて行くことだろう」と事態を楽観する。それに，ヘンリーから何の便りも来ないので，マライアは自尊心を傷つけられ，ヘンリーへの腹いせから，いよいよ，ラッシュワース氏との結婚を決意する。彼女は財産と身分と都会の雑踏と広い世間に，傷ついた心の慰めを求めようとしたのだ，と作者は書いている。作者はマライアの心理を次のように分析している。

In all the important preparations of the mind she was complete; being prepared for matrimony by an hatred of home, restraint, and tranquillity; by the misery of disappointed affection, and contempt of the man she was to marry. (II, iii)

マライアの心理描写は，ジェーン・オースティンの筆力が，いよいよ円熟の境地に達したこと，女性の心にひそむ魔性を解明する力が数段前進を遂げていることなどを示すもののようである。ラッシュワース夫人が息子に家督を譲って，バースへ引きこもることになり，ラッシュワース氏はマライアとの挙式を急ぐ。そして二人の新婚旅行には妹のジューリアも同行することになり，Mansfield Park に取り残されたファニーの重要性が増大する(II, iv)。そして作者の関心は，いよいよ，メアリー—エドマンド—ファニーの心理的なもつれの取り扱いに集中することになる。これら三人の

間で接触がしばしば持たれることになり，メアリーとエドマンドとのある日の会話の中で，牧師のことが話題になる。メアリがこう言う。「田舎の牧師先生が灌木の植え込みといったものを持とうなどと高望みをなさるなんて，全く，思いもよらないことですわ」つまり，ここでも，メアリーは牧師を小馬鹿にした発言をしているが，この話題はそれ以上の進展は見せない。"Be honest and rich" を生活信条とするメアリーは，彼女の関心の対象であるエドマンドが，牧師志望などは棄てて，軍人にでもなってくれればよいと思う。

IV

ところが，物語は思いがけぬ方向へ進行し，*Mansfield Park* 全篇を通じて，もっとも劇的な盛り上がりを見せてくれることになる。マライアを失い，ジューリアにも去られたヘンリーが，意外にも，それまでは眼中になかったファニーに接近して行くのである。ところで，ヘンリーのファニーへの接近を扱うに際して，作者ジェーン・オースティンは一つの特殊の技法を駆使している。それは，ヘンリーがファニーに対して発するせりふが，最初から，大いに芝居がかっている事実に見られる。一例を示そう。

"It is as a dream, a pleasant dream!" he exclaimed, breaking forth again after few minutes musing. "I shall always look back on our theatricals with exquisite pleasure. There was such an interest, such an animation, such a spirit diffused ! Every body felt it. We were all alive. There was employment, hope, solicitude, bustle, for every hour of the day. Always some little objection, some little doubt, some little anxiety to be got over. I never was happier. (II,v)

このような，それまでの会話とは全くスタイルを異にする「せりふ」をヘンリーに言わせる作者ジェーン・オースティンの意図については，後段で触れるつもりであるが，物語の筋をたどりつづければ，ヘンリーの口から上に引用したせりふが発せられてから暫らくして，グラント博士とエドマンドとの間で，「聖職授与」のことが話題になり，エドマンドの今後の

収入は，年収七百ポンドであることが語られる。それを聞いてヘンリーは，それは自分の小遣銭ほどのものだと思う。ヘンリーはエドマンドの「最初の説教」を是非聴きたいものだと言い，また，メアリーは，エドマンドが間もなく牧師になるのだと聞いて心に衝撃を受ける。メアリーは牧師の妻になるのは身分を落とすことだと思っている (II, v)。

ヘンリーは，いよいよ，本腰になってファニー攻略に取りかかる。ヘンリーは妹のメアリーに，"I have a plan for intermediate days," と言う。これは，明らかに，ファニーを意識している浮気男のせりふである。そして彼は更に，"my plan is to make Fanny Price in love with me" だと言明する。そして妹メアリーの兄ヘンリーを見る眼は確かである。"You must have a somebody." ヘンリーが怠惰と愚かさから，ファニーを浮気の対象として選んだのだと，メアリーは断言する (II, vi)。

ヘンリーのファニー攻撃はますます激しさを増す。トマス卿もヘンリーのファニーへの執心に気づき，それを良縁だと思って，ヘンリーに加担する。

一方，エドマンドの聖職就任が差し迫った問題となる。Thornton Lacey の牧師館の修理や模様替えのことが話題になるが，エドマンドは，"I must be satisfied with rather less ornament and beauty." と言う。話は「不在牧師」のことに触れ，エドマンドが Mansfield Park に住んでいて，日曜日ごとに Thornton Lacey へ説教に行くことの是非が論じられるが，エドマンドは「不在牧師」であることに満足しないだろう，とトマス卿が言う (II, vii)。

作者はヘンリーのファニーへの接近のプロセスを，飽くまで，リアリスティックな筆致で描いている。しかし，トマス卿がファニーのために開くことになった舞踏会のための準備に熱中するファニーの扱いには，ジェーン・オースティンならではの筆の冴えが見られるし，彼女の作品にしては珍らしく，ロマンチシズムの香りが感じられるかと思うと，作者は，そのような描写のすぐあとで，ロマンチシズムやセンチメンタリズムを"weaknesses" だときめつけるというゆとりを見せている (II, ix)。

一方，エドマンドは，いよいよ，来るクリスマスに聖職授与があることになり，彼はそのことと，そして結婚のことで，頭が一杯である。意中の人は，もちろん，メアリーである。しかし，彼はメアリーの真意を測りかねて苦悩する。彼はメアリーが自分を愛してくれているような気もするが，彼女がひっそりした田舎暮らしを嫌い，はっきりとロンドン生活が好きであることを思うと，彼は希望が持てなくなる。ファニーにはエドマンドの気持が手に取るように判るが，メアリーが彼にふさわしい女性だとは思わない。〔と同時に，彼女は彼を自分の恋人と呼ぶこともできない。〕いよいよ，舞踏会の日が差し迫り，エドマンドがメアリーに "first two dances" のパートナーになってほしいと申し入れに行くと，メアリーは冗談とも真面目ともとれる態度で，「あなたとダンスをするのは，これが最後ですわ。だって，私，牧師先生とはダンスをしたためしがございませんもの」，と答える (II, xi)。メアリーは，エドマンドが，いよいよ，聖職に就くことになりそうなので，いらだちを覚える。メアリーの真意は，トマス卿の息子としてのエドマンドには魅力を感じるが，牧師に「成り下がった」エドマンドには愛想がつきるわけである。

ヘンリーのファニーへの執心は募る一方であり，ファニーの兄ウィリアムの海軍大尉への昇進にも力を貸して，ファニーに恩を売ることになるに及んで，彼女への圧力が更に加わって来る。と同時に，ファニーに対するヘンリーのせりふが更に雄弁調を帯びて来る。ヘンリーは彼女にプロポーズする。ファニーはすげなく断る。ファニーは，ヘンリーがもう二度とプロポーズすることはないだろうと思うが，ヘンリーは断られても平然とした顔をしている。兄ヘンリーに頼まれて，メアリーもファニーを攻めたてる。トマス卿も，しきりにヘンリーとの結婚をファニーに勧める。そしてヘンリーとの結婚を承諾しようとはしないファニーを難詰するトマス卿のせりふも雄弁調であり，また，ある意味では，名文でもある。

ファニーは，トマス卿から，兄ウィリアムの昇進のことを持ち出され，ヘンリーとの結婚を拒むのは，「忘恩の徒」の仕業だとまで言われる。そして *Mansfield Park* という小説は，かなりのスペースにわたって展開さ

れる，ヘンリーのファニーへの求婚の描写において，かつてなかったほどの緊張と盛り上がりを見せている。弱々しい性格の持主のファニーらしからぬ強い抵抗の心理描写には，作者ジェーン・オースティンの鋭い洞察と細心の観察が示されている。それは，ファニーという一女性の問題である次元を超えて，ジェーン・オースティンの抱いている「結婚哲学」にまで高められている。そしてこの Henry—Fanny motif を扱うに際して，作者は，登場人物，殊に，ヘンリーやトマス卿などに，この作者の他の作品の中で，それぞれの登場人物に言わせているせりふとは，かなり異なった調子のせりふを言わせている。そして，男性が異性に対して抱く愛情を，トマス卿の口を通して，"the transient, varying, unsteady nature of love" (III, ii) であるときめつけている時のジェーン・オースティンは，既に，人間の愛情のもろさ，はかなさを達観しており，いわば，大作家の心境に到達していたことを示している。そして第三巻第三章には，ファニーがバートラム夫人に，しばしば，読んで聞かせている書物の一つとして，シェイクスピアの『ヘンリー八世』が挙げられている。つまり，作者ジェーン・オースティンは，この Henry—Fanny motif を捉えて，シェイクスピア的なモチーフ，"dignity, pride, tenderness, remorse" (III, iii) を追求して来たことを，それとなく，示唆しているもののようだ。ヘンリーやトマス卿が口にするせりふの多くは，いわば，"dramatic speech" の効果をあげることを意図したものであり，*Mansfield Park* という小説のかなりのスペースを割いて描いて来たヘンリーの仕草は，結局，『演技』だったんですよ，と作者は言っているもののようである。そして手を変え品をかえての攻撃にも陥落しないファニーに手を焼くトマス卿は，次男エドマンドまで動員して，ファニー説得に当らせる。ここに，Henry—Fanny—Edmund motif が展開されることになり，この小説の微妙な心理描写は一段と精彩を放っている。エドマンドはファニーにヘンリーとの結婚を勧める。それに対するファニーの強い否定 "Oh ! never, never, never ; - - -") などには，シェイクスピアの直接的な影響が感じられる (Cf. *King Lear*, V, iii, 308)。メアリーを意識しているエドマンドは，ファニーにヘンリー弁護を力説し，

エドマンドを意識しつづけるファニーはヘンリーを拒みつづける。エドマンドは，ファニーの気持が，そのうちに変わるだろうと思っている。ロンドンの友人宅へ去ったメアリーは手紙によるファニー攻撃を始める。ヘンリーもロンドンへ去る。エドマンドは，メアリーがいなくなってファニーが淋しい思いをするだろうと思うが，実は，メアリーの存在がファニーにとっては大きな苦しみの種だったのである。第三巻第六章は，Fanny—Edmund—Mary motif を「明暗 (chiaroscuro)」の技法を用いて描いて絶妙をきわめている。そしてヘンリーにそそのかされてファニー宛に書くメアリーのロンドンからの手紙は，いわば，ジェーン・オースティン文学の一つの頂点を示すものである。

V

ファニーのポーツマス行きとともに，*Mansfield Park* という小説には，初めて場面の大転換が見られる (III, vii)。それまで，物語は，もっぱら，ほぼ同一のシチュエーション，ほぼ同一の舞台での，登場人物の仕草やせりふが，なだらかに，一つの連続性を保ちつつ，繰りひろげられて来ている。そして，いわゆる，"Portsmouth chapters" (III, vii–III, xv) は，作者がそのすぐれた頭脳の働きを存分に見せてくれる何通かの書簡文という収獲のほかに，この作者にしては珍らしい「対照 (contrast)」の技法をも，ところどころ，試みている点が注目される。そして物語のテンポが急激に速くなり，作者は物語の終末を急ぐのであるが，あれほどしつこくファニー攻撃をつづけて来たヘンリーが，突如として，ラッシュワース夫人，つまり，マライアと駈け落ちをしてしまうのである。と同時に，この *Mansfield Park* には，かなりの悲劇的要素が加わって来るが，もちろん，全篇の基調を一変させるまでは至っていない。

ヘンリーとマライアとが犯した明らかな「罪 (sin)」を，単に「愚行 (folly)」があばかれたのだと思っているメアリーとの性格上の大きな違いに気づき，また，バートラム家の長男トムが大病にかかり，回復は不能であると思っ

て，エドマンドへの再接近を計っていることを知らされて，その自尊心や虚栄心を傷つけられたエドマンドの心は，メアリーのもとを離れて，ファニーの方へ傾き始める (III, xvi)。そして物語は，ようやく，最初の意図通りの結末に漕ぎつけることになる。

ところで，物語を以上のように概観して来ると，*Mansfield Park* という小説には，三つの大きな盛り上がりがあることがわかる。一つは Henry—Maria motif であり，一つは，Henry—Fanny motif であり，もう一つは，Fanny—Edmund—Mary motif である。しかし，この小論の結論に入る前に，是非，ここに補足しておきたいことがある。それは，作者ジェーン・オースティンの面目がもっともよく発揮されている個所，つまり，作者の才筆がその閃きをもっともよく見せてくれている個所は，ポーツマスのわが家に帰ったファニー宛に送られて来るメアリーの手紙であるということである。書簡文の名手でもあるジェーン・オースティンは，ファニー宛のメアリーの書信に，天成の才智，才女の頭脳の冴え，微妙な女心を読み取る鋭さ，などのありったけを発揮する機会を見出しているかのようだ。メアリーは兄ヘンリーにそそのかされて，彼の野望達成の片棒をかつぐだけでなく，バートラム家の長男トムの大病を意識し，次男エドマンドへの再接近の下心をファニーに伝えようとするところなど，ある種の女性の複雑な心理作用，悪女なるものの深謀遠慮の末恐ろしさ，計算高さ，などを木目こまかく，そしてアイロニーをこめて描いて見せてくれる。

VI

Mansfield Park 制作に取りかかった際の作者の，いわゆる，"original design" は，既に見て来たように，「聖職授与 (ordination)」であったはずである。そこで，筆者はそのことを念頭において *Mansfield Park* を通じて，"ordination" に触れた個所，それに関連がありそうな個所を，物語の本筋とのつながりにおいて，克明に拾ってみるという作業をしてみた。上に記して来たのが，いわば，その報告書である。そしてここまで書き進ん

で来た筆者の抱く卒直な感想は，やはり，Henry—Maria motif と，それにつづく，Henry—Fanny motif 及び Mary—Edmund—Fanny motif が主旋律であって，エドマンドをめぐる "ordination" というモチーフは，いわば，旋律以下の弱々しいものであるということである。もっとも，大きなスペースを割いて書いたものが必ずしも作者の第一関心事であるとは限らない場合がしばしばある。作者の心ひそかなある種の配慮から，僅少の頁数，僅少の行数で処理したところに，その作者がもっとも言いたかったこと，その作者の真意がこめられている場合もあり得る。しかし，何はさておいても，読者の心を引きつけなければならない小説という文学作品を制作するに当って，作者がもっとも多くの読者を引きつけそうだと思い，そしてもっとも多くの苦心を払うのは，その作者の判断において，もっとも面白そうだと思った要素であるに違いない。それに，まだ作家としてきわめて弱い立場にあったジェーン・オースティンとしては，"Henry—Maria affair", Henry—Fanny motif, Mary—Edmund—Fanny motif などが，もっとも読者の興味を呼びおこしそうだと思ったとしても，それは少しも不思議ではあるまい。もっとも，作者がもともとの意図通りに，"ordination" を第一関心事として，絶えず，念頭において筆を進めたとしても，それを具象化することの困難さと常に闘いつづけたのかも知れない。作者のペンが心ならずも，ヘンリー——マライア事件や，ヘンリーのファニーへの執心，エドマンドをめぐるメアリーとファニーの心理のもつれなどを追いつづけている間も，その心は，エドマンドの "ordination" の問題を何とかしなくちゃ，という意識で占められていたのかも知れない。あるいは，作者が，ヘンリーやマライアやメアリーその他の主要人物の創造に夢中になり過ぎて，エドマンドの「聖職授与」のことは，つい，失念しがちになり，ところどころで，はっと気がついて，いわば，合の手の形で，"ordination" に関係のあることを，ひと言ふた言，挿入したのかも知れない。いずれにせよ，*Mansfield Park* という小説の第一主題が "ordination" であると言うのには，かなりの無理が伴うもののようだ。

ところで，ジェーン・オースティンが，"Now I will try to write of some-

thing else, and it shall be a complete change of subject——ordination." と書き記した時の彼女の真意が何であったか，について，多少の補足的解説を試みたい。

これも，既に触れたことの繰り返しであるが，ジェーン・オースティンが *Mansfield Park* の制作に取りかかった際，彼女は，今度こそは，物語の取材の範囲をひろげよう，女主人公の結婚に至るまでのプロセスのほかに，何か別の要素を付け加えよう，男女の愛情のもつれを解きほぐす作業のほかに，例えば，登場人物の職業にも触れてみよう；言いかえれば，主要登場人物の中に「職業人」をも仲間入りさせよう，などと意欲の拡大を計ったのではあるまいか。そして，ジェーン・オースティンの場合，彼女が自信をもって描きうる「職業人」と言えば，父親ジョージ・オースティンや長兄ジェームズ・オースティンを身近かに持つ「聖職者」であり，そしてフランク・オースティンとチャールズ・オースティンという二人の兄弟を持つ「海軍軍人」であろう。事実，*Mansfield Park* には，「牧師職」のほかに，「海軍軍人の生活」，「航海」，「軍港」，そして「乗馬」，「造園」など，努めて，取材の領域をひろげようと苦心を払っている節が感じられるし，いつものジェーン・オースティンらしくなく，「自然描写」や「風景描写」をも試みてそして成功している。*Mansfield Park* には，彼女の既刊の二作 *Sense and Sensibility* や *Pride and Prejudice* と比べて，内容が著しく "compact" であり，構成が精密であるだけでなく，作品としての広さ深さが感じられ，そして人間に対する鋭い洞察と深い理解が更に加わっている。

VII

ジェーン・オースティンが *Mansfield Park* を制作した段階において，彼女は，今日われわれの言う "situation" という概念を持っていなかったことがはっきりしている。かなりの長さのこの物語のほとんど全篇にわたって，"chapter" と "chapter" との区切りを示す明白な場面の転換は，ほ

とんど，考えられていないもののようだ。ただ，なだらかにつながって行く家庭上の小事件や，親類や友人知人同志相互間の往き来や，よどみなくつづけられる会話の連続などが，細心の注意を払って描かれており，区切りを示す標識らしいものは何一つ認められないところで，一つの章が終り，別の章が始まっている。物語の連続性やリアリティーを尊重し過ぎるあまり，後世の小説制作者たちが非常に効果的に活用することになる "situation" の設定という技法を，いわゆる閨秀作家の代表ともいうべきジェーン・オースティンは，まだ，思いついていなかったもののようだ。場面の転換の少い物語の展開には，対照の効果その他の欠如による，ある種のもどかしさが感じられないこともない。ジェーン・オースティンの小説技法には，まだ，未発達の要素がかなり多く見出されると言えよう。

(1977年8月)